The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	朱有燉の朱子学受容 ： 周王府における江西の儒者グループを中心に
Author(s)	温, 彬
Citation	待兼山論叢. 芸術篇. 2025, 58, p. 63-88
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/100919
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

朱有燉の朱子学受容

――周王府における江西の儒者グループを中心に――

温　彬

キーワード：朱有燉／演劇／朱子学／江西

まえがき

朱有燉（一三七九年－一四三九年）は明代開国皇帝朱元璋の五男たる周定王朱橚の嫡長子である。洪武十二年（一三七九年）に安徽省鳳陽で生まれ、洪武十四年（一三八一年）に父親の朱橚と共に封地の開封に移住した。洪熙元年（一四二五年）には父親の薨逝により、その爵位を継承し、明朝の第二代周王となった。正統四年（一四三九年）に封地の開封府で没し、諡号は「周憲王」である。

明代前期を代表する宗室劇作家の一人である朱有燉は、本世紀初頭以来、彼の作品だけでなく、その生涯や人間関係も先行研究において注目される重要な焦点となっている。[1] 朱有燉の人間関係に関して、1970 年代に台湾の任遵時氏がこれを整理し、[2] その後、中国大陸の朱仰東氏がさらに補足し、これに大きな貢献をしている。近年、朱氏は『嘉靖本誠斎録所載朱有燉交遊考』と『朱有燉与劉三吾交遊稽考』、および『朱有燉人際交往補考』の三つの論文を発表し、先行研究では触れられていなかった朱有燉と交流のあった人物について多くの情報を補足した。[3] しかし、朱有燉の学問的や、教育背景に関する先行研究はほとんどなかった。事実、朱有燉は優れた劇作家であるだけでなく、儒教、仏教、道教に精通した博学な人物でもあるのは、彼の作品にもよく表れている。台湾の曾永義氏は著書『明雑劇概論』の中で、朱有燉

の劇作における儒・釈・道の思想の表現について詳述している。氏は、朱有燉が三教（儒・釈・道）合一を主張しながらも、根底にあるのは儒教であると指摘している。[4] したがって、彼の作品の思想や主旨をさらに把握するためには、彼の学問的背景、特にその根底である儒学の受容についての探究も、現代の朱有燉研究において欠かせない課題であるべきだと考えられる。

本稿は、先行研究に基づいて、これらの周王府で務めていた儒者たちの背景と学風をさらに調査し、朱有燉の青年時代に周王府に務めていた属官や、または周王府に関連する儒者の中に、江西から来た一群の儒者が存在していたことに焦点を当て、彼らの学風が朱有燉に大きな影響を与えた可能性があることをさらに指摘する。[5] この「江西儒者グループ」の分析に関して、曾恕、余士美、黄榘、周德、吴勤、鄒朴、曾麟などの七人で取り上げる予定である。上記を踏まえ、筆者は朱有燉自身の詩文から彼の朱子学修養の実践をさらに観察し、上述の江西儒者グループたちの影響のもとで、彼が朱子の教説から逸脱し、朱子学と象山学を統合した特別な朱子学思想を形成したことを指摘する。

第一節　周王府の儒学者たち―『開封府志』の記載と江西儒者グループを中心に―

まず注目すべきなのは、朱有燉の子孫である朱睦㮮（一五一七－一五八六）が編纂した地誌である『開封府志』に記載された次の文である。[6]

> 憲王は有燉という、彼は周定王の第一子だ。彼の性格は警抜で、学問を倦まず嗜む云々、彼の進退周旋などの挙止は高雅で、**儒者の気象を有している。日々は劉醇、鄭義などの詞臣と経義を剖析し、前賢が掲げなかった義理を掲示することができる。**彼は更に吟詠好きで、書道が巧で、絵事にも精通して、詞曲など全てが妙品の堺に達した。

ここで、朱有燉はよく劉淳、鄭義という二人と共に、日々に儒学の経典を

切磋琢磨していることを述べている。

まず、この劉淳[7]に関する情報は、『明史』列伝第二十五で確認できる。さらに、何喬遠（一五五八－一六三二）の『名山藏』巻三十六、李賢（一四〇九－一四六七）の『大明一統志』巻二十七にも彼に関する記述がある。[8] ただし、これらの情報は非常に不備であり、彼の生涯などに関する記述は極めて限られている。要約すれば、彼は開封府の符祥県（現在の河南省開封市符祥区）の人であり、洪武末期には開封府の元武県で訓導（地元の学官）を務めていた。周定王は彼を招聘して世子であった朱有燉の師匠とし、その後、周王府の事務を管理する長史となった。そして、現存しないが、彼の『菊荘集』という著作が当時は残されていた。上記の史料に加えて、焦竑の『国朝献徴録』巻一百五には、李濂（一四八九－一五六六）が著した「周府長史劉先生淳伝」が収録されている。[9] この文は比較的詳細な紹介があり、劉淳の祖先に関する情報だけでなく、彼が周王府で世子の師匠および長史を務めていた期間の詳細も記されている。ただし、最も価値があるのは、李濂が上記の資料には含まれていない刘淳の著作を記録していることである。上記の『菊荘集』以外にも、刘淳はまた『白雲小稿』『修辞正音』『四書解疑』『小学大学羣経要義刊正』『王叔和脉訣纂述』『傷寒秘要』の六つの著作があることがこの文から知られる。しかし現在ではすべて散佚している。

それら著述の書名から見ると、劉淳は非常に幅広い学問分野にわたり、儒学だけでなく文学、医学、音韻学などにも触れており、まさにオールラウンドな学者であると言える。また、彼の儒学著作である『四書解疑』や『小学大学羣経要義刊正』の名から見ても、彼の儒学の教養は朱子学に近いものだと考えられる。まず、「四書」とは『論語』『孟子』『中庸』『大学』の四部の儒学典籍を指す。南宋の紹熙元年（一一九〇年）、朱子はこれらの四つの典籍をまとめて刊刻した。朱子はまた、自らの一生を『四書章句集注』の著述、則ち四書への注釈に捧げた。その後、四書は朱子学の中で最も基本的で、最も重要視されている資料となった。劉淳の『四書解疑』という書名を見ると、彼が四書に対する研究を「他人の疑問を解ける」ほど、深く行って

いたことがわかる。劉淳が四書の研究を重視していたということは、彼は朱子学者である可能性が高い。

次に、『小学大学羣経要義刊正』に関して、書名からみれば、これがおそらく、『小学』、および上記の『大学』という二つの儒教の書籍で、収録された他の儒教の経典（『礼記』や『書経』など）の言葉に対する校訂を内容とする著である。これは、彼がこれらの『大学』、『小学』という二つの典籍を非常に重視していたことを示している。古い時代の中国では、貴族の教育は大学と小学の二つに分かれていたと言われている。小学教育は、識字、六芸（礼儀、音楽、弓道、書道、騎馬、算数）を含む基礎教育を主に指し、大学は君子の教育であり、主に自己修養と、人民を統治する学問を指している。「大学」と「小学」の区別は朱子からではないものの、朱子は特に小学教育を重視していた。彼は宋の淳熙十六年（一一八九年）に弟子たちと共に『小学』を編纂した。この本は様々な儒教の経典における言葉などを選録し、これらを内編の四巻（立教、明倫、敬身、稽古）と外編の二巻（嘉言、善行）に分かれ、儒教の基礎的な啓蒙書とも言えるものである。『小学』は朱子の主要な著作ではないものの、元代の北方の朱子学者である姚枢（姚敬斎、一二〇一－一二七八）、劉因（劉静修、一二四九－一二九三）、許衡（許魯斎、一二〇九－一二八一）などがこの本を非常に重要視していた。許衡は生徒に対して通常、『小学』を出発点とし、次に《大学》を教授していたとされている。注目すべきは、許衡が元から明にかけて開封地方を含む北中国の朱子学の発展に、かなり大きな影響を与えたことである。明初まで、北方の朱子学者は浙江や江西地方のような厳格な師弟システムを持っているようには見えないが、彼らは常に許衡を典範としていた。[10)] この意味で、『小学大学羣経要義刊正』を編纂し、『小学』と『大学』の二部の本を重視していた劉淳は、許衡に憧れている北方の朱子学者の一人である可能性があろう。

そして、鄭義に関して、朱有燉の書いた『長史鄭義家譜引』には次のような記述がある。

本府の右長史の鄭義は世の中の通儒だ。彼は文章政事、徳行知識すべてにおいて素晴らしい。（彼は）**理を窮めて、性を尽すことにおいても、妙の堺に至った。**[11)]

劉淳と同じように、鄭義も周王府の長史である。「理を窮め、性を尽す」とは『易』の『説卦伝』から来た言葉である。これはおおよそに、「万物に備わっている理を知り窮め、理の極処である人の性を行い尽くす」ことを指している。[12)] この言葉から見ると、儒学の理論的な修養であれ、その道徳的な修養であれ、鄭義はすでに非常に高い境地に達していると言える。しかし、『潮州府志』の巻二十九によれば、鄭義が周王府に入ったのは明宣宗時代初期（一四二六年－一四三五年）であり、[13)] この時点で朱有燉は既に四十七歳を超えていた。

上記の『開封府志』の記録により、劉淳と鄭義は先行研究で既に注目されている。特に、朱有燉の師である劉淳の重要性は言うまでもない。[14)] しかし、先述のように、鄭義が周王府に入った際、朱有燉は既に四十七歳超であり、その学識はすでに成熟していたと考えられる。そのため、この記録だけでは、朱有燉の青年時代の儒学教育の経緯を正確に把握することはできない。そしてまえがきで述べたように、当時（朱有燉の青年時代）の周王府とその周辺には江西から集まった一群の儒者がいた。このグループが朱有燉に与えた影響も無視できない。

まずは余士美（生没年不詳）である。余士美の経歴は雍正十年（一七三二年）に成書された地誌である『江西通志』（以下『通志』）の巻八十九で詳細に記載されている。[15)] この『通志』によれば、余士美は江西徳興の出身であり、洪武年間に儒学の訓導を務め、後に国子監の助教に転任した。洪武帝は彼の『尚書』に対する解説を聞いて非常に満足し、彼を磁州という所の知州（地方長官）に昇進させた。建文帝時代、彼は誣告を受けて降格されたが、永楽元年（一四〇三年）に周王朱橚が釈放された後、朱橚は永楽帝に彼を周王府の紀善として招聘するよう上奏し、永楽帝の許可を得た。そして、永楽

十八年（一四二〇年）まで周王府で勤務した。紀善の主な職務は、親王を監督し、その誤りを戒めることであるが、『明史』志第五十一に記載されている「すべての宗室は十歳以上になると、宗学に入り、教授と紀善が師となる」という記述から見ると、彼はおそらく周王の世子（親王の嫡男）、つまり朱有燉の教育も担当していた。[16)]

朱仰東氏の考証によれば、余士美の父は当時の江西の大儒である余仲敬だとされている。[17)] 余仲敬とその父余済、祖父余芑舒は、清代初期の黄宗羲（一六一〇－一六九五）らによって著された中国宋元時代の儒学者を記した『宋元学案』の巻八十九「介軒学案」の部分に記載されている。この記載によれば、余氏一族は当時江西省徳興地区で有名な朱子学の家系であったことが分かる。しかし、朱氏は彼らの学風について詳しく説明していない（興味深いことに、余士美は『宋元学案』と『明儒学案』のどちらにも記載されていない）。

『宋元学案』における「介軒学案」の記載によると、余士美一家の学風では、彼らは「主静（しゅせい）」の修養に重点を置いているように見える。ここでいう「主静」とは、宋代の新儒学の創始者とされる周敦頤（周濂渓、一〇一七－一〇七三）が提唱した、邪念や欲望を取り除き、心を虚静な状態（心にわだかまりがなく、静かで落ち着く状態）に保つことを目的とした修養法であり、具体的な方法はしばしば静坐などで表現される。『宋元学案』によれば、余仲敬の学風は「理学や経済の道において、究極に達しないものはないが、（その学）が主静を本とする」とされている。[18)] また、余仲敬の父である余済が詠んだ詩にも「髪はすでに白くなり、この人世で瞬く間に過ぎ去る光陰を過ごしている。しかし、心の修養は「静」を通じて実現されることを誰もが知っているか」という一句があり、[19)] 彼らが主静の修養を重視していたことが分かる。同様に、『学案』では、余芑舒も読書の後には「襟を整えて端坐する」ことを好んだと言われている。[20)] このように、余氏の家学においては、「主静」が確かに非常に重要な修養方法であったことが分かる。上記の上で、余士美の学風は彼の家族と同様に、「主静」を基盤としている

と考えられる。

次は黄榘（生卒年不詳）という人である。彼については記録がそれほど多く見られない。任遵時氏の研究によると、黄榘は江西新淦出身であるとされている。彼は洪武末年から周王府で伴読を務めはじめ、その任期は明確ではないが、永楽二年（一四〇四年）頃まで周王府に在籍していたと考えられる。[21] 伴読という官職について、《明史》志第五十一巻によれば、「伴読は侍従の起居を取り扱い、経史を陳述する」[22] とあり、これも教育に関連した職務のようである。黄榘の生涯についての記録が少ないため、彼の学風を知るのは難しい。しかし、清の陳田（一八四九－一九二一）によって編纂された『明詩紀事』の甲籤巻二十二に記されている彼が残した『過陸象山墓』の詩から彼の学風が少しだけ見え隠れする。[23]

> 西風が吹く中、私は馬に乗って宿屋で停まった。その時、遠くの茅屋から鶏の鳴き声が聞こえ、人々はまだ眠りから覚めたばかりだった。秋の気配を帯びた鐘の音が、両側に竹が植えられた小道を通い、遠くの荒野にある寺院から聞こえてきた。石橋は霧に覆われ、橋の下の水面には満天の星が映っている。朝の冷たい空気が私の服にしみ込み、明るい月の光が特に白く輝いている。田に水が流れ込み、道の脇には青々とした野草が生えている。陸象山が伝えた学問は今や非常に寂れており、その精髄はおそらく地元の山神しか知ることができないだろう。

詩の最後の二行（傍線部）から見ると、彼は朱子の論敵である陸九淵一派の学問、すなわち象山学の衰退に対してある種の遺憾の態度を持っているようである。これは黄榘が象山学に同情している可能性を示唆している。陸九淵が江西金溪の出身であり、宋時代に、その学問は江西一帯に大きな影響力を持っていた。そして元と明時代には、江西地域で朱子学は盛んだったが、陸九淵の学に同情する学者も存在していた。例えば、江西貴溪出身の陳苑は、陸九淵の学説を支持し続けた。また、南方中国で非常に影響力のある江

西の朱子学者である吳澄（呉草廬、一二四九－一三三三）や鄭玉（一二九八－一三五八）も、朱子と陸九淵の学説を調和させることを主張していた。黄榘の陸九淵への同情は、このような学術的な環境の中で生まれたものかもしれない。黄榘自身も朱子と陸九淵の調和を主張する者の一人であったのではないだろうか。

周王府にはまた周徳（周是修、一三五四－一四〇三）という人物もいる。彼についての記録は前述の二人よりも多く、生涯および著述に関する情報が比較的豊富である。『明史』列伝第三十一によると、周徳は江西省泰和出身である。彼は洪武末年に安徽省霍邱県で訓導の職に就いていた。[24] その後、洪武帝によって周王府で祀正の職に異動させられ、後に紀善の職に昇進した。建文帝の時代に周王一家が雲南に配流されると、周徳もまた衡王のもとで紀善の職に異動させられたが、最終的には実現せず、南京の翰林院での職務にとどまった。燕王朱棣が南京を攻略すると、周徳は應天府学で建文帝のために殉死した。享年四九歳であった。

周徳は数多くの著作を持っており、その詩文集である『芻蕘集』のほか、儒学に関連するものでは、楊士奇（一三六五－一四四四）の記録から見ると、『広演太極図』、『論語類編』、『詩小序』、『詩集義』、および古人の忠貞な事績をまとめた『綱常懿範』十二巻と『觀感録』一巻がある。[25]『芻蕘集』には「広衍太極図説」という文章が収録されているが、これが楊士奇のいう『広衍太極図』であるかどうかはわからない。[26]『広演太極図説』の内容は先に言及した宋の新儒学の創始者である周敦頤の太極図および『太極図説』における思想を、先賢の論説を踏まえて更にこれを解釈する文章である。周敦頤の『太極図説』は主に太極から二気（陰陽）五行（木火土金水）、そして万物までの宇宙生成に関する問題を論じている。これは後の儒学の発展に重要な影響を与えている。その後の宋、元、明の儒学者も太極の問題に強い興味を抱いていた。この文章で周徳は、これらの先賢たちの説をもとに、さらに「陰陽」という二気、「春夏秋冬」という四季、および「木火土金水」という五行と、人間の道徳意識を含めた世間万物との対応関係を論じている。なかで

も注目すべきは、文中の「太極というものが理である」という一文である。周敦頤の『太極図説』の太極を理（天理）と解釈したのは朱子の主張である。周徳が少なくとも宇宙論では朱子の説を受け継いでいたことがわかる。

周徳の学風については、彼の別の文章である『賢王修己十箴』からその趣旨を窺うことができる。該当文は『芻蕘集』巻四に収録されており、周徳が当時の周王である朱橚に宛てたものである。[27] この中で、彼は朱橚に対して十種の修身法を提案し、それぞれは「存誠」「立敬」「体仁」「勤務」「尚謙」「守慎」「行恕」「知足」「主静」「保名」である。ここで彼は余士美一家と同様に儒家の「主静」修養を述べている。[28]

> 王よ、主静をしましょう、心を平静な水のように保ってください。聖人が天下を治めることができるのは、「無為」の境地に達するからです。自己を欺かずに、自己の心を保つために欲望を抑えましょう。すべての妄念が王の精神を消耗し、名誉を損ない、災いをもたらします。妄念が一度起こった場合、後悔しても取り返すことはできません。歴史の成功と失敗は参考しなければなりません。

以上のように、周徳は周王に対し、妄念と欲望を抱かず、精神を水のような穏やかな状態に保つことを望んでいた。朱子自身も主静を述べているが、それを成聖（聖人になる）のための根本的修養とは考えていなかった。むしろ心の虚静を過度に追求することは、学者を道教や仏教などの異端の魔窟に陥れる可能性があると考えている。そのため、朱子は主静を「主敬」という、彼の最も重要な修養法のなかに組み込んでいる。しかし、周徳が提唱した「十箴」の中で、敬（立敬）と静（主静）は並列している。これは、周徳にとって、主静が独立した価値と意味を持ち、単なる「主敬」の附属ではないことを示している可能性が高い。このことから、彼は余士美一家と同様に、主静の修養をとりわけ重視していると考えられる。

周徳の周王府での任期は洪武末年から建文初年までの間で、必ずしも長い

とは言えない。したがって、彼は劉淳や鄭義のように朱有燉と日々「経義を剖析」することができないと考えられる。しかし、洪武二十九年の春（一三九六年）、十八歳の朱有燉は洪武帝の命令に従い、河南の精鋭な部隊を率いて北平地域を巡回し、周徳は彼の側近として仕えていた。[29] このために、巡回中にも朱有燉は周徳に教えを乞うことができるだろう。そして、彼は北平から帰還した後、洪武三十年（一三九七）に周王府の紀善に昇進した。したがって、洪武三十年から建文元年（一三九九）までの二年間、彼は当時世子であった朱有燉の教育にも関与していた可能性が高いといえる。故に、朱有燉の学問は彼の影響を受けた可能性も高い。周徳はこの『賢王修己十箴』で説かれている修身の道を朱有燉に教えた可能性もある。

次に、周王府に関連するもう一人の儒者である吳勤（字は孟勤）について少し触れたい。吳勤に関する記録は主に天順五年（一四六一年）に成書した地理志である『明一統志』の巻五十六、凌迪知（一五三二－一六〇一）が編纂した『万姓統譜』の巻十、『皇明文衡』巻九十六に収録された梁潜（一三五六－一四一八）の作『吳先生哀辞』と『国朝献徵録』巻九十三に収録された胡広（一三六九－一四一八）の作『河南開封府儒学教授吳公勤行状』に集中している。[30]『明一統志』と『万姓統譜』の記述は簡略である。両者によれば、吳勤（字は孟勤）は江西永新の人であり、胡広が彼を翰林院に推薦したが、彼は自分の代わりに楊士奇を推薦し、後に楚王府の教授になった。ここでは吳孟勤と周王府の関係については触れられていない。しかし、胡広の『河南開封府儒学教授吳公勤行状』は詳細に記録されており、筆者が、その内容を年譜にまとめると以下のようである。

図1　吳勤の年譜

元至順元年（一三三〇）	江西省永新県にうまれる。
元至正七年（一三四七）	科挙に参加することを希望したが、父に止められる。
元時代末期	江西地方軍閥が混戦していた時期、吳勤は守臣に進言をしたが、受け入れられなかった。
至正十八年（一三五八）	洪都（江西省南昌市）への避難中に軍閥の陳友諒（一三二〇－一三六三）の攻城に遭遇し、永新に戻る。

至正二十三年（一三六三）	洪武帝朱元璋が吉安地区を平定した際、泰和令（泰和県の地方官）に吳勤を招聘しようとしたが、吳勤は断った。
洪武初年	南京に召集されて科挙を受け、武昌教授の職を授かったが、数年後に辞職して永新に戻る。
洪武二十一年（一三八八）	楚王の招待を受け、楚王府に来て王子たちに学問を教える。その間に蜀王や湘王との書信のやりとりもあった。
建文四年（一四〇二）	史館（翰林院）に招集され、『太祖高皇帝実録』の編纂に参加し、終了後に開封府の教授に任命される。この間、周王はよく彼を王府に招いて講義を行い、世子の朱有燉は彼に非常に敬意を持っていた。
永楽三年（一四〇五）	死去。『匡山樵者集』、『黄鶴山樵集』、『幽翁集』、『大義齋集』などの著作が当時は残されていた。

梁潛と胡広の記述から見ると、吳勤は当時の知識界で名声があり、彼の学問と品格は多くの知識人、乃至親王たちから尊敬されていた。しかも、彼の門弟の多くは後に高位に昇った。しかし、彼自身は才能に恵まれていながら一生を教育に捧げ、朝廷に重用されることはなかった。これについて胡広と梁潛は遺憾の意を示している。そのほか、彼らの文章では次の二つの点が注目される。

まず、梁潛と胡広の記述には、『明一統志』や『万姓統譜』に記載されている「胡広が吳勤を翰林院に推薦し、吳勤が楊士奇を自分の代わりに翰林院に推薦した」という事実は言及されていない。逆に、梁潛の『吳先生哀辞』によれば、彼は翰林院で吳勤を目撃している。胡広が翰林院に入ったのは建文年間に『太祖高皇帝実録』を編修したことがきっかけであり、彼が吳勤を翰林院に推薦したのもこの件に関連していると考えられる。同様に、楊士奇も翰林院に入ったのは建文年間に『太祖高皇帝実録』を編修することが契機であった。しかし、『明史』巻一四八によれば楊士奇の翰林院入りは当時翰林院で務めている王叔英（生年不詳－一四〇二）の推薦であり、[31] 吳勤については言及されていない。したがって、『明一統志』や『万姓統譜』の根拠が何なのか不明である。梁潛の自分が翰林院で吳勤を目撃したという記述からみれば、おそらく、吳勤も楊士奇を推薦した可能性もあるが、それは自分

の代わりに楊士奇を推薦したという『明一統志』や『万姓統譜』の記述とは異なり、むしろ楊士奇と共に翰林院に入った可能性が高いのではないか。

つぎに、胡広の文章からは一つの重要な情報が提供されている。それは、吳勤が『太祖高皇帝実録』の編修作業が完了した後、開封府で儒学教授の職に就き、周王朱橚の招きを受けて日々周王府に講義のために訪れたことである。しかも、朱有燉も彼に対して非常に敬意を持っている。したがって、彼が朱有燉に与えた影響は小さくないと考えられる。しかし、胡広と梁潛の文章からは、彼が学識豊富な大学者であり、諸般の儒教の経典を精通していることはわかるが、その学風については詳細がわからない。この問題に関しては、新しい資料の発見を待つ必要がある。

周王府内には、他にも江西出身の学者で生涯に関する記録の少ない者が何人かいる。まずは曾恕である。管見では、最初にこの人物に言及したのは朱仰東氏である。[32] しかし、曾恕の生涯に関する記録は乏しく、彼が江西省贛県出身であり、南昌で儒学の教授を務めたこと、洪武二十四年に周王府の左長史に任命されたことしか知られていない。彼の出身地が江西であることから、筆者は彼の存在をここで言及するのみで、資料の限界からさらなる調査を行うことができない。曾恕以外にも、『江西通志』には鄒朴と曾麟という二人の学者に関する記録があるが、これらの二人も先行研究ではあまり言及されていない。[33]

鄒朴（字は尓愚）は江西省永豊県出身である。『江西通志』巻七十七によれば、彼は周王府で「儒官」として仕えていた。[34]「儒官」は王府内での公式の官職ではないが、「儒」の字を持っていることから、彼が担当していたのは紀善や伴読など、王府内の儒学教育に関連する職務かもしれない。『江西通志』には、彼の周王府での任期は記されていないが、査継佐（一六〇一－一六七六）の著した史書である『罪惟録』列伝巻十二と谷応泰（一六二〇－一六九〇）の著した史書である『明史紀事本末』巻十八によれば、彼が周王府に入ったのは建文初年のころであり、建文帝が周王朱橚を幽閉した後、彼は監察御史に転じた。[35] つまり、彼が周王府にいた期間はおそらく一年未満

であったと考えられる。また、周徳の『刍荛集』に収録されている『舒情賦』では、周王朱橚が彼や鄒朴、曾子禎（後述の曾麟である）らを風景遊覧に招いたことが言及されている。[36] しかし、これ以外に、彼の周王府での活動についての記録は見当たらなかった。

曾麟（字は子禎[37]）は、江西省廬陵県出身である。『江西通志』によると、洪武年間にはまず江西省靖安県で儒学教授として活動し、後に周王府での紀善に昇進した。しかし、建文帝が周王朱橚を逮捕した後、彼自身が朱橚を十分補佐できなかったことに深く自責の念を抱き、そのため自殺した。江西の地元の人々は彼を記念して、「二忠祠」という廟宇を建て、永楽帝が建文帝を打倒した靖難の役で建文帝に殉じたもう一人の廬陵の人である曾鳳韶と共に祀った。『江西通志』によれば、彼は忠実で正直な態度で当時の王世子である朱有燉に仕えたことから、彼は朱有燉の教育活動に直接参加したことが分かる。

曾恕、鄒朴、曾麟らの生涯記録は先に述べた通り、非常に簡略である。彼らに関するより詳しい情報を見つけることができなかったため、彼らの儒学の造詣や学風をさらに確認することができない。そのため、現在言及できる情報は非常に乏しい。

以上を踏まえて、先の文書に記載されている、周王府と関連のある江西の儒者を、表をまとめて示すと以下のようである。

図2　朱有燉の教育活動に関与している江西儒者

名前	出身地	官職	任官期間
余士美	江西饒州路徳興	紀善	一四〇三－一四二〇
黄榘	江西臨江路新淦	伴読	不明－一四〇四後
周徳	江西吉安路泰和	祀正－紀善	不明－一三九九
呉勤	江西吉安路永新	非王府所属	一四〇二－一四〇四
曾恕	江西赣州路赣県	左長史	一三九一－不明
鄒朴	江西吉安路永豊	不明	約一三九八－一三九九
曾麟	江西吉安路廬陵	紀善	不明－一三九九

要約すると、周王府に仕え、または周王府と往来があるこれらの儒者を整理と、朱有燉の周りには江西出身の儒者グループが存在していることが分かる。これらの人々の生涯や他の情報は詳細ではないが、大まかに言えば、彼らは少なくともつぎの二つの特徴を持っている。

まず、彼らの地域と人間関係の範囲は非常に重なっている。余士美を除いて、周徳、吳勤、鄒朴、曾麟の出身地はすべて現在の江西省吉安市に属しており、地域は大体元代の吉安路に近い。黄榘と曾恕の出身地は、それぞれ吉安路に隣接する臨江路と贛州路に所属しているが、彼らの出身地は吉安路の側に近い。これらの人々の出身地は非常に近いのである。その他にも、多くの先行研究で指摘されているように、当時の江西の士大夫たちは自身の江西の同郷を朝廷に推薦することを好んでいた。[38] したがって、周王府の江西人、または江西の吉安を中心とする士大夫団体の形成は恐らく偶然ではなく、同郷の推薦の結果である可能性が高いと考えられる。たとえば、周徳が周王府に祀正として入るのは、彼の吉安の同郷であり、前述の周王府の紀善である曾麟が推薦したからである。この出来事は、『国朝献徴録』巻一百五の中で収録されている郭子章（一五四三－一六一八）による『周紀善逸事』で記録されている。[39] 一方、楊士奇によると、周徳は朝廷に、同じく江西出身の梁潛（泰和出身）や劉叔毖（廬陵出身）を推薦したこともある。[40] これは、これらの江西人が相互に推薦されて周王府に集まった可能性が高いことを示している。

次に、さらに重要なのは、これらの人々が周王府での職務が学問と教育に関連していることである。前述の通り、余士美は伴読、周徳、黄榘、曾麟は紀善であり、鄒朴は職位が不明だが、前述の通り儒官であるため、儒学教育と関連していると考えられる。吳孟勤は直接的に周王府での職務に就いてはいないが、頻繁に周王や世子に講義を行っていた。したがって、これらの江西出身者は基本的に朱有燉の教育活動に参加しており、彼らの学風が朱有燉に与える影響は無視できない。

江西地域における最も重要な学風の一つは、上述の朱子の朱子学と陸九淵

の象山学の融合である。宋時代末期には、江西鄱陽出身の「三湯兄弟」と称される湯中、湯巾、湯千という兄弟の三人が朱子学と象山学の対話の可能性について議論を開始しており、彼らの友人である程紹開（一二一二－一二八一、江西貴溪出身）もまた書院を建て、朱子学と象山学の融合を求めていた。そして、この思想は彼の弟子である吳澄によっても継承された。[41] 後に、吳澄は江西で「草廬学派」を創設し、前述した北方の朱子学者許衡と共に元代の朱子学の代表的人物とされた。これにより、江西の儒者たちは「朱子学と象山学の融合」に特に関心を持っていることが分かる。また、象山学を専らに学ぶ静明宝峰学派の陳苑は、江西饒州路周辺でも一定の影響力を持っている。筆者は、上記の江西の儒者たちは、おそらく上述の二人の江西の大儒の影響を受けていると考える。

先に述べたように、周王府における江西の儒者が多く吉安路出身である。『宋元学案』と王梓材（一七九一－一八五一）、馮云濠（一八〇七－一八五五）による『宋元学案補遺』によれば、吉安路出身の吳澄の門弟は合計六人記録されている（吳澄の孫の吳当も晩年に吉安に在住しており、彼を含めると吳澄の学の伝承者は七人になる。また、黄榘が出身した臨江にも吳澄の門弟が多数存在する）。その中には、楊准（泰和出身）、康震（泰和出身）、解観（吉水出身）などが後に故郷で弟子を教え、彼たちの門下生が多数になったことで、吳澄の学が吉安での影響力が拡大されたことが想見できるだろう。[42] したがって、周王府には吉安路出身の儒者が吳澄の影響を受けた可能性は高いと考えられる。吳澄の学において、「静」または「主静」は主要な修養方法の一つである。[43] これが、周徳がとりわけ先引した『賢王修己十箴』で周王が主静の修養を実践すべきだと強調した理由の一つかもしれない。同様に、江西象山学の余脉である静明宝峰学派の創始者の一人である陳苑は江西饒州出身である。象山学において、主静と静坐は最も重要な修養方法の一つである。そして、その門人で最も有名なのが「江東四先生」と呼ばれている祝蕃、李存、舒衍、吳謙である。この四人には、祝蕃以外の三人は全て饒州安仁出身である。したがって、饒州路出身の余士美一家が主静や静座の修

養を重視する理由は、おそらく象山学を受け継いた陳苑の学の影響を受けていると考えられる。

江西の朱子学は、全体的には「朱子学と象山学の調和」の形態で現れている。筆者は、周府の江西の学者たちは、吳澄の草廬学派や陳苑の静明宝峰学派の影響を受けている可能性が非常に高いと考えている。そのため、彼らの学風はおそらく「主静」に偏っており、つまり内心の平静を追求し、無駄な考えや外部の物事に悩まされない傾向がある。そして、これが朱有燉は静坐を通じて修養を重視する理由であろう。

第二節　朱有燉の朱子学受容

上述のように、師承や明初の思想文化背景から考えても、朱有燉は朱子学の「原理主義者」であるとは考えられない。この小節では、彼の儒学的修養の実践を分析することで、彼が朱子学をどのように受容したかをさらに検討する。

周知のように、仏教と道教の理論体系には、「成仏」（仏になる）「成仙」（仙人になる）を目的とする修行論が存在する。同様に、儒学にも「成聖」（聖人になる）を目指す修行論がある。朱子学では、最も基本的な修行方法は「格物致知」である。朱子によれば、すべてのものに、それぞれの存在の理が内在している。しかも、これらの存在の理は宇宙の究極的実在としての天理の個別的表現である。このために、我々はこれらの物に即して、人間の認知能力を十分に活用し、それぞれの存在の理を探究し窮めれば、その中に一貫している天理を把握し、自分の心の中で潜んでいる理（これはつまり人間の本質、或いは儒家では「性」とも称されるものである。）を明らかにすることができる。朱有燉の『菊花譜序』からは、彼が「格物致知」の修行を実践したことがわかる。[44)]

凡そ物は天地間に形が賦与されて、すべては味わうべし趣、推すべし理

がある云々、私はかつて、園圃のなかに散歩して、その趣を味わいて、その理を推する云々。

朱有燉にとって、宇宙の万物はすべて「理」と「趣」の二つの重要な要素を持っている。理は上記の「存在の理」であり、趣は物事の美的な味わいである。上記の引用文によれば、朱有燉は自らの王府の庭園を散策する際、花の「存在の理」を考察すると同時に、花の「美的な味わい」をも味わっている。朱子の学説では、「格物致知」は主知的な認識プロセスであった。その具体的な方法は、各々の事物の理を、類推および帰納によって認識上の理解を実現し、最終的に終極的な「天理」の把握に到達する。認識結果の正確性を保証するために、この過程では感情的要因を排除し、絶対的な理性を保持する必要がある。しかし、朱有燉の場合、彼は物事の主知的な理解に加えて、感性的な美的観照をも持っている。これは明らかに朱子の「格物論」の本来の性格から逸脱している。具体的には、朱有燉の格物の実践は、主知の理解と分析に加えて、美的体験の性格も含んでいる。

朱子学を含む宋代以来の新儒教において、その学派によって修養の方法はさまざまであるが、最終的な目的はすべて「復性」、すなわち人が持つ先天的な善なる性に戻ることである。新儒教では、人間は自身の「性」として宇宙の究極的実在である「理」を受け継いでいる。この「性」は人が人であることの根本的な規定であり（すなわち人性である）、人間のすべての道徳行為の源泉でもある。この性は消えることはないが、人の物欲によって遮蔽されることがある。そのため、新儒教のすべての修養は、「性」の遮蔽を解除し、その輝きを現すことを目的としている。上記の格物致知のほか、朱有燉も性への黙識に重きを置いており、これは仏教の「仏性を悟り」に似ている。この点については、彼の『好鷹癖歌』という詩から次のように見ることができる。[45)]

私の生涯で好きなものはほとんどないが、鷹が好きである。それは鷹が

凶暴だからではなく、その神々しい姿を■■（判読難）と感じるからである。この季節は天気が冷え込んでいるが、それでも翼を広げて高く飛ぶ。一度飛べば何万マイルも飛び、長く一箇所にとどまらない。この時期、豺狼、狐、兎の姿は見当たらないが、雄鷹は翼を広げて九霄まで飛翔し、その壮大な志は天地八方に満ちている。これはただ目の前の少量の食べ物に集中する鵷と鷺などの小鳥とはまったく異なる。彼らは自分の一生を水草の中で過ごすだけである。私は完全なる自然の性を持っており、それ故に鷹の超然とした姿に魅了された。私はただ、**自らの性を黙識し、自らの心を覆う雲を癒すことを願っている**。

この詩の中で、朱有燉は鷹の非凡な姿に対する賞賛を表現している。彼にとって、水草の中に身を隠し、小さな利益に執着する小鳥とは異なり、鷹は大きな志を持っている。朱有燉は文末で、自分も鷹のように世俗の小利に縛られず、自己の性を黙識することに集中したいと表現している。「黙」とは「話さない」ことを意味する。そして、「黙識」とは、言葉や認知を超えて、超越的な存在を把握する方法である。この詩の中で、朱有燉は具体的にどのように自己の性を黙識するかについては述べていないが、彼が書いた別の詩を見ると、静坐が主な方法の一つであることがわかる。

（一）**静座して閑かにみれば、理が自然に明らかになる**。世間の是非や名誉は争うべきではない。我が身は常に善行で楽しく、何事も先取りしたいとは思わない。私は竹に寄りかかり、夜の雨音を聞き、夕雲がない所で秋日の晴天を楽しんでいる。これら二つの閑静の趣味を理解する人は誰だろうか。私は世俗の中にいるが、思考と感情は既に世俗を超越している。[46)]

（二）私は体が弱いため、病気を養うためによく暇な時間を持っている。寒気の残る窓から外を見ると、突然春の訪れの兆候を見つけた。**のんびりとした日中を過ごし、静寂の中で世界の最も真実な姿（天真）を見**

た。漬物の香りに誘われて書道の練習に集中できなくて、そして表面で泡立つ酒は最も芳醇だった。小さな書斎で香り高い香を灯して静かに座り、心が非常に幸福で快適だと感じた。[47)]

（三）私はこの「芸香閣」がとても好きだ。ここで初めて咲いた花を描いた翡翠の屏風が飾られている。私はここで漢代の楽府詩を吟じたり、晋代の『蘭亭集序』を模写したりしている。黄色い菊の花に霜のような色の蕊が含まれており、まるで天界から来た花が淡い香りをほのかに漂わせている。**私は静寂の中で太極を見つけ、突然、この清浄で安らかな景色こそが世界の本当の姿だと悟った**。[48)]

朱有燉は自身の静坐体験を描いた詩を多数持っており、上記の三つの詩を見ると、彼は世俗の騒乱から離れ、心が虚しく静かで安らかな状態にあることを特に追求している。仏教や道教の儀式的な静坐とは異なり、儒者たちの静坐は座り方や体勢を規定しているわけではなく、心を世の中の騒乱から解放し虚しく静かな状態にすることができれば、それを静坐と呼ぶことができる。興味深いのは、朱有燉の静坐が心を虚静な状態にするだけでなく、強烈な神秘体験の要素も持っていることである。上記の三つの詩の傍線部からも分かるように、朱有燉は心の安定の中で宇宙の究極的な実在、すなわち理、太極、または天真を体験したと主張している。前述の通り、儒家の見解では、天理とは人間の「性」であるとされている。そのため、朱有燉の静坐は意識の収束状態を追求するだけではなく、内面を湛然と虚静な状態にすることで、天理・性に対する直感的な体験を実現することを目指している。このように、彼は静坐を通じて自らの性を「黙識」するのである。

実際、宋代以降の新儒教の中では、静坐は非常に重要な修行法である。ただし、儒者によって静坐の機能と目的を理解する方法は異なっている。一般的に言えば、目的で分類すると、儒家の静坐は「自己覚醒」と「精神の収束」の二種類に分けることができる。朱子の師である李侗（李延平、一〇九三－一一六三）およびその所属する道南学派は、静坐を非常に重視してお

り、彼らは心の虚静な状態で「未発」、つまり天理・性を体験することを主張している。道南学派と同様に、朱子学に対立する象山学の静坐観もこの種類に属する。これは「自己覚醒」を目的とする静坐である。しかし、朱子の見解では、静坐は究極的な実在である天理を把握することはできない。それは意識を集中させる効果しか持たず、静坐中に特別な体験が起こったとしても、それは天理の「幻影」に過ぎず、真の天理ではない。さらに、儒者が静坐を通じて天理を把握しようとするのであれば、彼は仏教や道教のような異端とは変わらない。したがって、朱子が提唱する静坐は単に「精神の収束」を目的とするものである。先に引用した三つの詩からわかるように、朱有燉の天理・性を把握することを目的とする静坐実践は明らかに前者に属している。したがって、朱子学教育を受けた朱有燉の静坐観は朱子から完全に逸脱し、道南学派や象山学派の立場に回帰したと言えるであろう。これは非常に興味深く、彼自身の性格や仏教や道教への理解と関連しているかもしれない。ただし、彼の静坐自体への重視や心の虚静な状態への追求は、おそらく彼が、象山学の影響を受けた周王府の江西の朱子学者たちから学んだ「主静」の学風に由来する可能性が高い。

第三節　まとめ

上述から明らかなように、先行研究では、朱有燉の師である劉淳について言及されることが多いが、実際には劉淳以外にも朱有燉の教育活動に関わった江西出身の朱子学者が存在しており、彼らも朱有燉の思想形成において無視できない役割を果たしている。

朱有燉は朱子学の教育を受けたものの、朱子の「いい学生」とは言い難い。朱子が最も重視する「格物致知」の修養や、静坐に関する問題においても、彼は朱子が定めた方向から先に論じたように逸脱している。これは彼の江西出身の師匠たちと明らかに関連がある。一方で、静坐の目的が意識の収斂であろうと天理の把握であろうと、実践者は常に心を外部の誘惑や束縛か

ら引き戻し、常に純粋で静かな状態に置くことが求められる。したがって、先に引用した朱有燉の詩の中で「世間の是非や名誉は争うべきではない」と述べられているように、彼は名誉や利益など心を誘惑する外部の物事に対して強い警戒心を持ち、これらのものが心を乱すと考えている。おそらくそのため、彼の演劇作品にも物欲への警戒心がしばしば見られる。[49] この問題については、今後詳しく探究していく。

［注］

1） 本世紀以来朱有燉生涯に関する主な成果は次の論文に参照。陳捷「朱有燉生平及其作品考述」『芸術百家』第四期、二〇〇一年。趙暁紅「朱有燉生平正誤」『文学遺産』第一期、二〇〇五年。劉英波「明代四位散曲家補正」『西華大学学報』第一期、二〇〇七年。

2） 任遵時『周憲王研究』三民書局、一九七四年。

3） 「朱有燉と劉三吾交遊稽考」『中国小説戯劇研究』輯刊、二〇二一年。「嘉靖本誠斎録所載朱有燉交遊考」『中国典籍与文化』第一期、二〇一九年。「朱有燉人際交往補考」『戯曲研究』第三期、二〇二三年。

4） 曽永義『明雑劇概論』商務印書館、二〇一五年、二一三－二二三頁。

5） 上記の任遵時氏と朱仰東氏の研究では、これらの儒者たちの江西出身について言及しているが、彼らを一つの「群体」として見なしていなかった。実際、中国の歴史学界や思想史界では、「江西士大夫群」または「江西朱子学派」の存在が既に注目されている。後の部分で述べられているように、当時の中国では、これらの人々は強力な同郷人脈ネットワークを通じて、学術や政治の両面で大きな影響力を持っていた。

6） 「憲王諱有燉、定王第一子。性警抜、嗜学不倦云々、進退周旋、雅有儒者気象。日与劉淳、鄭義諸詞臣剖析経義、多発前賢所未発。復喜吟詠、工法書兼精絵事、詞曲種々、皆臻妙品」『開封府志』巻六、明万歴十三年刻本。

7） 『明史』と『国朝献徴録』には「劉淳」とされ、ほかの史料には「劉醇」とされている。ただし、事跡からみれば両者は同じ人である。本文には「劉淳」とする。『国朝献徴録』によると、彼の二人の兄弟の名はそれぞれに「劉深」と「劉温」といい、したがって彼は「劉醇」ではなく、「劉淳」であるはずだと考えられる。

8） 「明史」三、『百衲本二十四史』台湾商務印書館、一九八一年、一五二六頁。何喬遠『名山藏』成文出版社、一九七一年、一九九八頁。李賢『大明一統志』三秦出版社、一九九〇年、四六八頁。

9） 焦竑『国朝献徴録』上海書店、一九八七年、四七〇六頁。
10） 許斉雄『北轍―薛瑄与北方学派―』浙江大学出版社、二〇一五年、十四頁。
11）「本府右長史鄭義、為世之通儒。文章政事、徳行知識、皆有可観。窮理尽性、亦造乎妙。」「長史鄭義家譜引」（成立年代不明）『朱有燉集』斉魯書社、二〇一四年三月。七五〇頁。
12） 今井宇三郎、堀池信夫、間嶋潤一「易経下」『新釈漢文大系』巻六十三、明治書院、二〇一七年、一七一四頁。
13）「広東省潮州府志」二、『中国方志叢書』成文出版社、一九六七年、六〇七頁。
14） 先行研究の中で最も詳しく劉淳を紹介しているのは、注二に挙げた任遵時氏の研究である。しかし、任氏も指摘しているように、劉淳が青年期の朱有燉と共に過ごした時間はそれほど長くなっておらず、彼が朱有燉の学問形成にどの程度の影響を与えたかは確定し難いである。
15）「江西通志」『景印文淵閣四庫全書』史部二七四地理類第五一六冊、台湾商務印書館、六〇頁。
16）「凡宗室年十歳以上、入宗学、教授与紀善為之師」「明史」『百衲本二十四史』台湾商務印書館、一九八一年。七八六頁。
17）「嘉靖本誠斎録所載朱有燉交遊考」『中国典籍与文化』第一期、二〇一九年。
18）「其於理学経済之道、靡不究竟、而以主静為本」『宋元学案』中華書局、二〇〇九年、二九七六頁。
19）「白首黄塵送隙駒、那知静処有工夫」同上注、二九七五
20） 儒教の静坐法は座り方や身体の形にこだわることはなく、心が静かならどんな形でも静坐となり得る。同上注。
21） 同注二、八四頁。
22）「伴読掌侍起居、陳設経史」同注十六、七八六頁。「陳設」は配置するだけではなく、「陳述」という意味もある。ここでの「陳設」は「配置する」ではなく、「述べる」という意味だと考えられる。なぜなら、ただ本を整然と配置するだけでは、その役職も意味がなくなってしまうからであろう。
23）「西風匹馬駐郵亭、茅屋鶏鳴尚未醒。野寺秋声三径竹、石橋雲気一潭星。寒欺短褐霜華白、水落平田野蔓青。師友家伝今寂寞、欲移文字問山霊」『明詩紀事』台湾商務印書館、一九八六年、四四二頁。
24） 同注十六、一五七〇頁。
25） 楊士奇「衡府紀善周是修伝」同注九、四七三〇頁。
26）『刍蕘集』巻六、欽定四庫全書本、浙江大学図書館蔵。
27） 同上注。
28）「王惟主静、水止淵斉。聖人至治、貴在無為。寡欲養心、罔或自欺。一切妄作、祗使神疲。害名災己、雖悔曷追。古今成敗、可不鑑之」同上注。

29）徐紘「明名臣琬琰録巻十二」『四庫全書珍本』台湾商務印書館、十五頁。
30）『大明一統志』巻五十六、同注八、八六九頁。『万姓統譜』巻十、欽定四庫全書本、浙江大学図書館蔵。「皇明文衡」四、『四部叢刊縮編本』、商務印書館、一九六五年、七三三－七三四頁。胡広の文は注九に参照、四〇四九頁。
31）同注十六、一六〇八頁。
32）朱仰東『朱有燉年譜長編』蘭州大学出版社、二〇一四年、二二頁。
33）曾永義氏は朱有燉の父について紹介する際、彼が曾子禎、鄒尓愚、周徳ら周王府の属官たちとよく宴会を開いていたと述べている。ここで言及されている曾子禎と鄒尓愚は、曾麟と鄒朴のことである。しかし、曾氏は二人の名前に触れるだけで、さらに詳しい紹介は行っていない（同注四、一九四頁）。二人の生涯について比較的詳しく紹介しているのは、朱仰東の『朱有燉人際交往補考』である。同注三。
34）「江西通志」『景印文淵閣四庫全書』史部二七三地理類第五一五冊、台湾商務印書館、六四五頁。
35）「罪惟録」三六、『四部叢刊三編史部』上海商務印書館、一九三六年、五九－六〇頁。『明史紀事本末』巻十八、乾隆御覧四庫全書薈要本、浙江大学図書館蔵。しかし、朱仰東氏は彼が周王府に入った時期を洪武二十六年（一三九三）から洪武二十八年（一九三五）の間と推測している。関連資料が不足しているため、現時点では正確な結論を導き出すことはできない。『朱有燉人際交往補考』、同注三。
36）『刍荛集』巻四、欽定四庫全書本、浙江大学図書館蔵。
37）『江西通志』の巻七十七では、曾麟の字が「子貞」と書かれているが、同書の巻一百八では「子禎」とされている。さらに、この二箇所で下記の「二忠祠」の件に触れていることから、これらは同一の人物を指していることが分かる。また、前述の周徳の「舒情賦」では「曾子禎」とも書かれている。したがって、筆者は曾麟の字は「子禎」であるべきだと考えている。
38）呉琦、龔世豪「明初江西士大夫仕宦、交遊与郷邦団体―以胡広為中心的研究―」『江西社会科学』二〇一六年第一期。
39）同注九、四七三一頁。
40）同注九、四七三〇頁。
41）関連する先行研究は陳栄捷氏の『元代之朱子学』と岡田武彦氏の『王陽明と明末の儒学』の序論部分に参照。陳栄捷「元代之朱子学」『朱学論集』華東師範大学出版社、二〇〇七年、一九四－二一四頁。岡田武彦『王陽明と明末の儒学』明徳出版社、一九七〇年、九－四三頁。
42）『宋元学案』巻九十二の「草廬学案」と『宋元学案補遺』巻九十二の「草廬学案補遺」に参照。『宋元学案』中華書局、二〇〇九年、三〇三三－三〇九二頁。『宋元学案補遺』中華書局、二〇一二年、五四九七－五六〇三頁。
43）蒙培元『理学的演変―従朱熹到王夫之―』方志出版社、二〇〇七年、一四八頁。

44）「凡物賦形於天地間也、有可玩之趣也、可推之理也云々、予嘗歩於園圃、玩其趣而推其理也云々」「菊花譜序」（成立年代不明）『朱有燉集』斉魯書社、二〇一四年三月、七〇七頁。

45）「平生無所染，頗有好鷹癖。非圖多殺傷，神俊實〇〇。時当天気凉，方此分奮拳擊。一飛起万里，安能久栖遅。豺狼已絶蹤，狐兔应屏跡。修翎亘九霄，壮志横八極。岂与鵷鷺同，啾啾顧微食。徘徊水草中，縮頸自終日。中和道人本全真，愛此異類超凡群。惟將性理默參識，醫得心如一片雲」同注四十二、五八三頁。

46）「靜坐閑観理自明，是非栄辱豈須争。一身常在善中楽，萬事肯于先処行。嫩竹半欹聴夜雨，晩雲収尽看秋晴。両般清意誰能識，世事交遊物外情」同注四十二、六四九頁。

47）「多病常多暇、寒窓忽覚春。閑中宜日永、静裏見天真。裏鮓書難学、浮蛆酒最醇。小斎香一炷、端坐自怡神」同注四十二、六〇二頁。

48）「愛此芸香閣、初開翡翠屏。漢詞吟楽府、晋帖写蘭亭。霜蕊含黄菊、天花吐素馨。静中観太極、天地本清寧」同注四十二、六〇二頁。

49）朱有燉の作品における物欲への警戒意識について、筆者は以前に論じたことがある。温彬「朱有燉の「恋愛劇」の教化意味：戯曲『復落娼』『香囊怨』『団円夢』を手掛かりに」『フィロカリア』第四一号、二〇二四年。

［参考文献］

論文類

陳捷「朱有燉生平及其作品考述」『芸術百家』第四期、二〇〇一年。

趙暁紅「朱有燉生平正誤」『文学遺産』第一期、二〇〇五年。

劉英波「明代四位散曲家補正」『西華大学学報』第一期、二〇〇七年。

朱仰東「朱有燉と劉三吾交遊稽考」『中国小説戯劇研究』輯刊、二〇二一年。

朱仰東「嘉靖本誠斎録所載朱有燉交遊考」『中国典籍与文化』第一期、二〇一九年。

朱仰東「朱有燉人際交往補考」『戯曲研究』第三期、二〇二三年。

呉琦、龔世豪「明初江西士大夫仕宦、交遊与郷邦団体―以胡広為中心的研究―」『江西社会科学』二〇一六年第一期。

温彬「朱有燉の「恋愛劇」の教化意味：戯曲『復落娼』『香囊怨』『団円夢』を手掛かりに」『フィロカリア』第四一号、二〇二四年。

専著類

曽永義『明雑劇概論』商務印書館、二〇一五年。

任遵時『周憲王研究』三民書局、一九七四年。

朱仰東『朱有燉年譜長編』蘭州大学出版社、二〇一四年。

許斉雄『北轍―薛瑄与北方学派―』浙江大学出版社、二〇一五年。
『朱学論集』華東師範大学出版社、二〇〇七年。
岡田武彦『王陽明と明末の儒学』明徳出版社、一九七〇年。
蒙培元『理学的演変―従朱熹到王夫之―』方志出版社、二〇〇七年。

史料類
『開封府志』、明万歴十三年刻本。
何喬遠『名山藏』成文出版社、一九七一年。
李賢『大明一統志』三秦出版社、一九九〇年。
「広東省潮州府志」、『中国方志叢書』成文出版社、一九六七年
焦竑『国朝献徴録』上海書店、一九八七年。
『朱有燉集』斉魯書社、二〇一四年三月。
今井宇三郎、堀池信夫、間嶋潤一「易経下」『新釈漢文大系』巻六十三、明治書院、二〇一七年。
「江西通志」『景印文淵閣四庫全書』史部二七四地理類第五一六冊、台湾商務印書館。
「明史」『百衲本二十四史』台湾商務印書館、一九八一年。
『宋元学案』中華書局、二〇〇九年。
『明詩紀事』台湾商務印書館、一九八六年。
『刍蕘集』、欽定四庫全書本、浙江大学図書館蔵。
「明名臣琬琰録」『四庫全書珍本』台湾商務印書館。
『万姓統譜』、欽定四庫全書本。浙江大学図書館蔵。
「皇明文衡」『四部叢刊縮編本』商務印書館、一九六五年。
『宋元学案補遺』中華書局、二〇一二年。
「罪惟録」『四部叢刊三編史部』、上海商務印書館、一九三六年。
『明史紀事本末』、乾隆御覧四庫全書薈要本、浙江大学図書館蔵。

（大学院博士後期課程学生）

摘要

朱有燉的朱子学受容：以周王府中的江西儒者群体为中心

温 彬

明代初期的皇族朱有燉（1379-1439）被认为是当时最具代表性的剧作家之一。先行研究很早就注意到其作品中透露着一股浓厚的朱子学气息。但是在其朱子学受容的问题上，先行研究则只对作为其老师的北方儒者刘淳有所简单介绍。在本文中笔者试图指出，在朱有燉的青年时代，周王府中存在着一个来自江西的儒者群体，这些人基本都直接参与了朱有燉的教育活动，且带给朱有燉的影响可能较刘淳更为深刻。本文除了整理这些人的生平之外，还重点分析其中周德、余士美的学风，发现他们接受了江西当地朱子学与象山学（宋代与朱子学相对立的学说）融合的学风，故而十分强调通过静坐的修养方式来保持心灵的虚静状态，而这也成为了朱有燉对静坐，而不是作为朱子学的基本修养的格物致知抱有浓厚兴趣的原因。进一步说，朱有燉剧作中所透露的“保持对名利的警惕，以保证心灵常久的镇定为不为外物所乱”的趣旨很可能就是基于其自身的静坐体验。